

今週の為替相場見通し(2020年2月25日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		109.66 ~ 112.23	111.55	109.00 ~ 112.20
ユーロ	(ドル)		1.0778 ~ 1.0863	1.0846	1.0700 ~ 1.0950
(1ユーロ=)	(円)		118.47 ~ 121.38	121.07	119.00 ~ 122.00
英ポンド	(ドル)		1.2849 ~ 1.3053	1.2959	1.2850 ~ 1.3050
(1英ポンド=)	(円)	*	142.32 ~ 144.96	144.65	143.50 ~ 146.00
豪ドル	(ドル)		0.6586 ~ 0.6733	0.6627	0.6540 ~ 0.6700
(1豪ドル=)	(円)	*	73.19 ~ 74.48	73.94	72.50 ~ 74.40

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

金融市場部 グローバルFIチーム 上地 遼

(1)今週の予想レンジ: 109.00 ~ 112.20 円

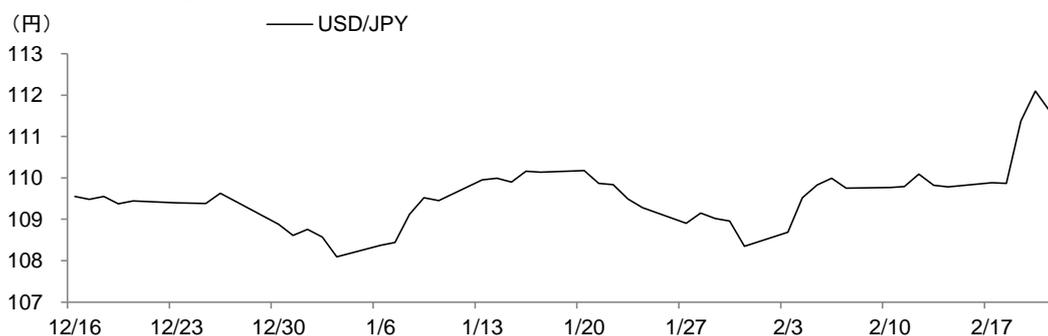
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円は、新型コロナウイルスの感染ペースが鈍化したこと、堅調な米主要経済指標によってリスクオンが過熱し、2019年4月以来の112円台をつけるまでに上昇した。週末には下落する局面が見られたものの、14日週と比較しても引き続きドルは高い水準を推移した。週初の17日は109.78レベルでオープン。先週のリスクオンは継続するも、ドル休日の中、動意は薄く109.90台前半で引けた。18日は米通信機器大手企業が新型コロナウイルスの影響を受けて1~3月期売上高が予想に届かないとの見通しを発表したことを背景に、アジア株の下落につれドル/円も109.60台まで下落する。しかし、NY時間に入ると米2月ニューヨーク連銀製造業景気指数が大幅に予想を上回ったことで一転し、一時109.90台まで回復。結局109.80台でクローズした。19日は新型コロナウイルス感染者数の増加ペースが鈍化したことや、中国政府が企業支援策を打ち出したことに加え、米主要経済指標が軒並み予想を上回り、約9か月ぶりに111円台に乗せた。一時111.60台をタッチするも、結局111.30台半ばでクローズした。20日は前日のリスクオンを引き継ぎドル円は上昇を続け、週最高値となる112.23まで上昇。その後は米株の下落につれ、112.10台前半でクローズした。21日は米2月PMIが予想を下回り、2013年以来の低水準となったことが嫌気され、米金利低下とともに111.40台後半まで一時急落した。米株が下げ止まりと共に、111.70台後半まで回復する場面もあったが、週末を前に取引は控えられ111.55レベルで越週した。

今週のドル/円は上値の重い展開を予想。先週、米主要経済指標の好調な結果で急速に上昇したドル/円だったが、先週21日の米2月PMIが6年4か月振りの水準に低下したことで、リスクオンからリスクオフへ転じたと思われる。ダウ平均は22ドル安、米30年債利回りも過去最低を更新(1.884%台)するほど、安全資産に買いが集中したことを受けてドル/円の上値は引き続き重いだろう。PMIではサービス業の悪化が目立ち、新型コロナウイルスによる影響が経済に顕在化し始めた。再び112円台をトライするには新型コロナウイルスに関する好材料が必要となろう。今週は25日(火)に米2月ダラス連銀製造業活動指数、27日(木)に米GDP(改定値・前期比)、米1月耐久財受注(速報)、28日(金)に個人所得・個人支出(前月比)がある。

(3)先週までの相場の推移

先週(2/17~2/21)の値動き: 安値 109.66 円 高値 112.23 円 終値 111.55 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

市場営業部 為替営業第二チーム 谷舗 直弥

(1)今週の予想レンジ: 1.0700 ~ 1.0950 119.00 ~ 122.00 円

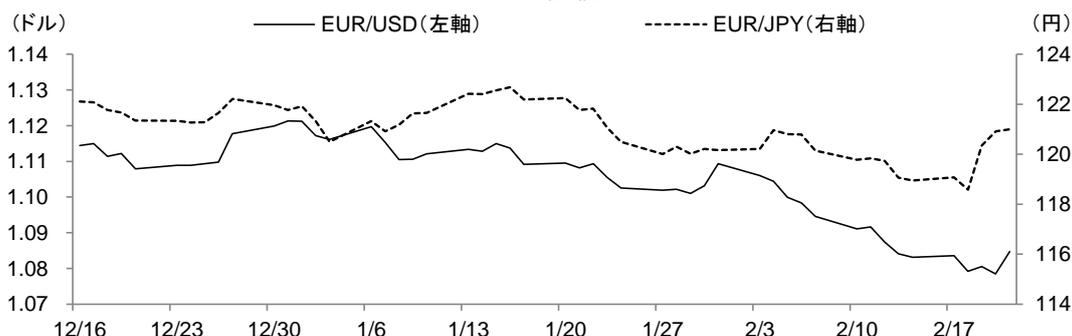
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドル相場は下落し、先週につけた約3年ぶり安値を更新した。週初17日に1.08台前半でオープンしたユーロ/ドルは、米国が休場となるなか、特段の材料なく横ばい推移となった。18日は独2月ZEW景況感指数が市場予想よりも大幅に悪化したことを背景にユーロ売りが強まり、1.07台後半まで下落した。その後、米金利が低下したことで一時的に1.08台まで回復したものの、欧州経済の悪化が懸念されるなかでユーロ買いは継続せず、再び1.07台をつけた。19日は1.08を挟んだ推移となったが、欧州経済の悪化懸念と好調な米国経済指標を背景にユーロ売りドル買いが進み、1.0782まで下落した。20日は米金利の低下幅拡大とユーロのショートカバーを受けて、一時1.08台を回復するも、堅調な米国の株式市場と経済指標の結果を受けて上値は重く、じりじりと下落した。21日は1.07台後半で推移するも、仏2月PMIが市場予想対比強い結果となったことを背景にユーロが買い戻され、更にその後発表された独2月PMI・ユーロ圏2月PMIも予想以上に強い結果となったことから1.08台まで上昇。その後は低調な米指標を受けてドル売りが強まったことから週高値となる1.0863まで上昇し、結局1.08台半ばで越週した。週明け24日は中国以外の国での新型コロナウイルスの感染拡大が嫌気され、グローバルに株価が下落したが、ユーロ/ドルは米金利の低下を受けたドル売りを背景に1.08台半ばで堅調推移となった。

今週のユーロ/ドルは堅調な推移を予想する。新型コロナウイルスによる経済的影響がどの程度あるかは足元の通貨の強弱に大きく寄与しているが、欧州については今月13日に行われた欧州委員会では成長率の見込みが据え置かれ、17日のユーロ圏財務省会合ではセンターノ議長が新型コロナウイルスによる影響は限定的と述べた。また、先週21日に公表された独・仏・欧2月PMIは市場予想対比で強い結果となり、概ねこうした見方を補強する内容となった。足元では若干ドル買いが進み過ぎている感もあり、今週のユーロ/ドルはユーロの買い戻し主体で推移すると予想している。ただし、イタリアでの感染拡大が報じられる中、上値は限定的となろう。経済指標は25日に独10~12月期GDP(確報)、27日にユーロ圏景況感/消費者信頼感、28日に仏10~12月期GDPとユーロ圏2月CPIが予定されている。

(3)先週末までの相場の推移

先週(2/17~2/21)の値動き: (対ドル) 安値 1.0778 高値 1.0863 終値 1.0846
(対円) 安値 118.47 高値 121.38 終値 121.07



(資料)ブルームバーグ

3. 英ポンド

(1)今週の予想レンジ: 1.2850 ~ 1.3050 143.50 ~ 146.00 円

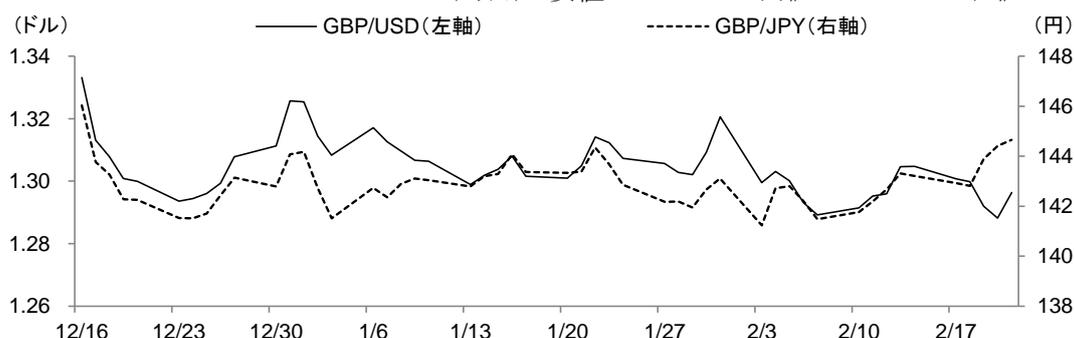
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、対ドル、対ユーロでは軟調気味の滑り出しから下押し加速、週引けに掛けて反発と出入りしたが、対円では、週初の小幅下押しからほぼ一貫して堅調推移を続けた。この間、主要通貨の中で目立って弱かったのは円。17日発表された日10~12月期GDP速報値は、前期比年率▲6.3%と大幅な落ち込みを見せた。昨年10月の消費税率引き上げの反動需要減で、もともと弱い数字(市場予想の中央値は同▲3.8%)が警戒されていたものの、発表されたのは弱めの予想を更に下回る数字で、円全面安を招いた。並行して、新型コロナウイルスに対する警戒感が他の先進国との比較で高かったことも円には不幸な材料となっただろう。その結果、対円でのポンド上昇はひと際明確となり、21日には144.96円と2ヵ月ぶりの高値まで続伸した。対ドル、対ユーロでのポンドは相対的に小動き。19日発表された英1月CPI、20日発表された英1月小売売上高の上振れはそれぞれポンド買い要因と読むこともできたはずだが、ポンドの反応は限定的。とりわけ、19日には、対円でこそ水準を切り上げたものの、対ドル、対ユーロではむしろ明確に下押ししてしまった。同日、金融規制に関して、EU側から英国を「特別扱いしない」との発言が聞かれたことが嫌気された可能性が考えられた。それでも、21日に発表された英2月製造業PMI暫定値の明確な上振れには意外感も強く、最終的にポンドは対ドル、対ユーロなどでも堅調地合いを強めた。とりわけ、その後発表された米の当該指標(2月製造業PMI/サービス業PMIの暫定値)が、対照的に明確な下振れを見せたことで、週引けに掛けて対ドルでの上げ足に勢いがつくことになった。

今週の英ポンド相場は、方向感を欠いた膠着を予想。対ドルで年初来のポンドの値動きを振り返ると、高値、安値共に徐々に切り下がる典型的な弱気相場が続いているように見える。しかし、これは対ドルでの値動きに当てはまるだけで、同じ主要通貨でも、対円、対ユーロで振り返ると、全く逆の絵が見える。つまり、ポンドに明確な方向感があるわけではなく、ドルが強く、円とユーロが弱い環境で、ポンドはどっちつかずの状態にあると言えるのだろう。今週は主要な英経済指標の発表はないし、1月に俄かに強まった英中銀利下げを巡る思惑は、財政拡大に向けた警戒感や足下英経済指標の改善を受け、当面後景に押しやられよう。潜在的なポンド売り要因として警戒されるのは、上述金融規制に絡む応酬のように、3月3日から公式に開始されるはずの英とEUの将来関係を巡る交渉に絡む思惑。規制を同調させる姿勢を見せない英に「恒久的な」同等性評価が付与される可能性などそもそもあるはずもないにもかかわらず、取り敢えず「高い球」を投げてみる英と、これまで同じ規制を共有してきた英に、にべもなく「特別扱いしない」と言い切るEU。交渉の常とう手段であるのはわかっているし、最終的に一定の妥協点を見出す可能性はあるものの、少なくとも交渉の序盤で譲歩を見せる可能性はお互いに考え難いだろう。並行してもうひとつ気に掛かるのは3月11日の英予算発表に向けた動き。こちら事前にも様々な観測が広がる可能性はあるだろうが、「大胆な財政拡大」を所与のものとして、実際の予算が「予想を上回る」内容となるか、「期待に届かない」内容となるか、現時点で読めない。また、財政拡大がポンド売りなのかポンド買いなのか市場の合意が形成されているとは言えず、予算を巡る観測がポンドが明確な方向感を打ち立てる可能性は考え難いのではないかと。

(3)先週末までの相場の推移

先週(2/17~2/21)の値動き: (対ドル) 安値 1.2849 高値 1.3053 終値 1.2959
(対円) 安値 142.32 高値 144.96 終値 144.65



(資料)ブルームバーグ

4. 豪ドル

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 川口 志保

(1) 今週の予想レンジ: 0.6540 ~ 0.6700 72.50 ~ 74.40 円

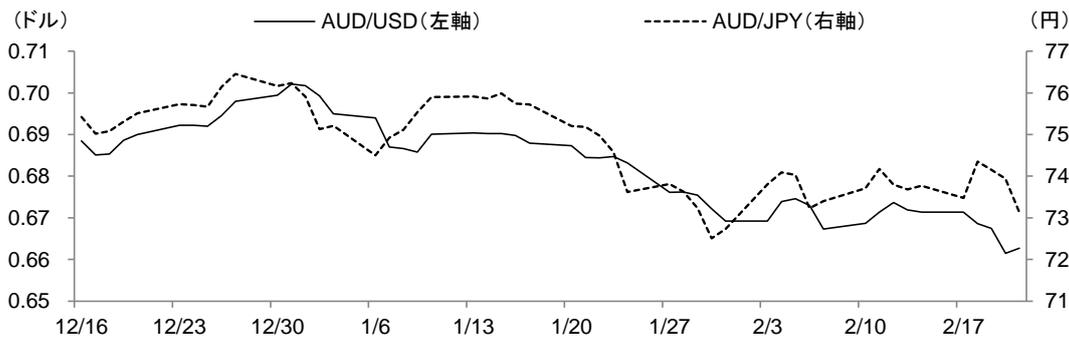
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル相場は17日、米国休場もあってノーイベント。1日を通してほぼ0.6713~33の範囲で収束。18日、RBA議事要旨は「2月の会合で追加利下げのケースを検討した」と実はハト派的な内容で、今後の利下げの可能性が示唆されると、素早く0.67台を割った。月初の議会委員会でロウ総裁は“失業率悪化を利下げの条件”としたものの、市場の大半は金利据え置きを示唆しているを見ていた。NY時間に株先が大きく下げると豪ドルは重く推移し、NY引けは0.6690近辺。19日は実需や短期勢による買い圧力で一旦0.67台に戻ったものの、NY時間にe-miniが強含む場面では徐々に豪ドルは下へ押し戻された。米1月米生産者物価が市場予想を上回るとさらに下げ、0.6665近辺まで下落。FOMC会合の議事要旨では「現行の金融政策「当面」適切、リスク警戒継続」との文言が繰り返され、直近の豪RBA議事要旨と大きく明暗を分ける形となった。円売りも加速する中、AUD/JPYは一日を通し右肩上がりで73.19円から74.48円まで上昇。20日は豪1月雇用統計、中国の景気刺激策発表を通して世界的先行き不安感から下押しし、NY時間には0.6610近辺まで下落。豪1月雇用統計でフルタイムが予想を上回り、労働参加率も改善したことで一旦0.6695まで上昇したが、RBAが注目している失業率が5.3%に悪化しており、0.6670まで下落。その後はPBOCがプライムレートを引き下げ0.6630まで下押し。低迷する中国国内の景気や新型肺炎の影響に対し、このような景気刺激策は広く予想されており、新型コロナの影響が2Qにまで長引く可能性と先行き不透明感から豪ドル売りが先行。また米2月フィラデルフィア連銀景況が堅調な数字となったことでドルに資金還流する流れとなり豪ドルは0.6610近辺まで下落した。21日、0.66台前半で始まった豪ドルは中国から新型コロナウイルスの症例や死亡件数が発表されると再度リスクオフとなり、0.6586近辺まで下落。NY時間では米2月サービス業PMIが50を切る形となり、米債がラリーする場面では豪ドルは0.6640まで戻し、引けは0.6630の半ば。

今週は経済指標や好材料が少ない中、新型コロナウイルスからリスクオフの流れへのSensitivityが高い状況はまだ続くとみる。ネガティブな材料には敏感に反応するが、多少の好材料があってもセンチメントは反応しづらくなっている。既に市場の大方がショートになっている為、今週中は0.65を割るような一段の下押しは考えにくいと新型肺炎関連のヘッドラインには注意したい。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(2/17~2/21)の値動き: (対ドル) 安値 0.6586 高値 0.6733 終値 0.6627
(対円) 安値 73.19 高値 74.48 終値 73.94



(資料)ブルームバーグ

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。